

オープンウォーターの広報に関する研究 —大会参加者のイメージに着目して—

野尻 奈央子*

Promotion of the Open Water Swimming —The rally participant's image—

Naoko Nojiri

Abstract

The purpose of the present study is to examine impressions of Open Water by questionnaire survey. The survey was carried out on 400 participants of "OWS Japan Open" and "Tateyama open water swim race".

The conclusions drawn in this study are as follows:

1. As for the impression to Open Water, high response rates were “Slightly healthful”, “Slightly good feeling”, “Slightly enjoyable” and “Slightly friendly”.
2. Strongest factor obtained by principal component analysis were, in order, “Refreshing”, “Fear”, “Acknowledgment”, “Face”, “Play”, “Cost”, “Participation” and “Achievement”.

Keywords: open water swimming, image, public relation

1. はじめに

オープンウォータースイミング（以下：オープンウォーター）とは、川、湖もしくは海洋などの自然環境のなかの水泳競技とされている。また、そのルールについては、FINA（国際水泳連盟）ルール 1.1¹⁾で定められている。

オープンウォーターの FINA ルール²⁾では、そのルールが以下のように明示されている。オープンウォーター競技は 5km, 10km, 25km の個人種目と、同一所属の男女 2 名で構成された 5km, 10km, 25km のチーム種目を公式種目とする。また、これらは海洋などの自然環境のなか、周回コース、折り返しコース、片道コースのいずれかの方法で行われる。海の潮流や川の流速や水質などについては、その安全が確保される場所で、かつ水深が 1m 以上でなければならない。なお、競技会開催の最低水温は 14℃と定められていて、ウェットスーツの着用は禁じられている。その中で、5km 競技は、オープンウォーターでは短距離であり、水の格闘技と考えられるほど、水中での激しい争いがある。一方、25km 競技では、大自然の中をハンドラー^{注 1)}の指示のもと、泳ぐことに

* 教養部

なる。ハンドラーは、目標物の確認をしながら選手へ方向を指示し、選手の栄養補給を行い、無線で得た情報を泳いでいる選手に様々な方法で伝える。したがって、25km 競技は、選手とハンドラーとの信頼関係が必要な競技である。

ところで、オープンウォーターには、FINA ルールとは別に、ローカルルールも存在する。ローカルルールではオープンウォーターは、一般に「オーシャンスイミング」や「ラフウォータースイミング」などの名前で親しまれている¹⁾⁶⁾。また、ローカルルールでのオープンウォーターについては、海洋などの自然環境で泳ぐことは変わらないが、距離は定められておらず、参加者が安全で楽しく快適に泳ぐことを目的として開催されている。年齢や競技レベルに関係なく、順位をねらうトップ選手から、達成感や自然との一体感を味わう参加者が同じ海洋を泳ぎ切ることから、ローカルルールでのオープンウォーターは、市民マラソンや山登りに近いスポーツとして位置づけられ、近代のスポーツにマッチしたニュースポーツと考えられる。

オープンウォーターは、1991 年から FINA 世界選手権で公式種目として開催され、1996 年には日本初の世界選手権が福岡で行われた。このように、オープンウォーターの歴史は、まだ浅いのである。また、オープンウォーターレースの多くは、海で長距離を泳ぐことから、一般に遠泳と混同されやすい。遠泳について、佐野³⁾は、主として海で、おおむね 1km 以上の距離を計画的に泳ぐことであると定義づけている。また、田中ら⁷⁾は、遠泳は、水泳能力に関係なく、集団で隊列を組んで長時間泳ぐものであり、その速度は水泳能力の低い者に合わせて泳ぐことになることと述べている。つまり、遠泳泳法は、常に顔が上がっている状態を保てる平泳ぎや横泳ぎなどを用いることが多く、これは、団体の安全確認をしながら同じペースで泳ぐために有効な泳法であると考えられる。それに対し、オープンウォーターは、個人またはチームでの高度な競技性¹⁾⁵⁾が求められることから遠泳とは異なる。

今まで遠泳に関する研究は数多く行われてきた。椿本ら⁷⁾は、遠泳は長時間泳ぐための泳法の習得に適していて、初・中級者の平泳ぎに関しては、遠泳を行うことによって、水泳技能の向上を促進できたと報告している。また、高橋ら⁸⁾は、遠泳時において、低水温環境下での長時間の遠泳における体温反応は、皮下脂肪に大きく影響され、体脂肪率が低い者は体温の低下が早く、低下度も大きくなると報告している。したがって、遠泳時は体温が奪われやすいため、体脂肪の多い者が有利と考えられる。さらに、田中ら⁴⁾は、小学生にとって、人工的なプールの中で水泳技術を習得させることだけでなく、遠泳をすることによって、自然教育を考えさせ、協調性などを身につける自然教育の場として有効ではないだろうかと述べている。このように、遠泳は、持久力向上、精神的効果、水泳技能の向上に適しており、オープンウォーターも同様の効果が期待できると考えられる。

ところで、筆者は、オープンウォーターは、日本において確立されたスポーツではないが、これから発展していく可能性があるスポーツと考える。そこで、オープンウォーター参加者のオープンウォーターに対するイメージを明らかにすることにより、オープンウォーターの魅力を具体的に分かり易く表現できると推測する。また、今後のオープンウォーター普及活動に生かせるデ

ータも得ることができると思う。

イメージ (image) とは、心理学事典⁹⁾によると、心像であり、外界からの感覚・知覚体験に類似したものとして体験されることである。また、心像とは、過去の感覚・知覚の記憶の再生や、これから体験されることの予測である。そして、イメージはいろいろな形で活用されている。例えば、スポーツを対象としたイベントを開催することは、企業のイメージアップとして、スポーツが持つ明るさや爽やかさといったイメージを売り物¹⁰⁾にし、CM などにも活用されている。また、自社製品や企業自体のイメージ向上を狙ってイベントスポンサーとなるケースもある¹¹⁾。

これまでスポーツに関するイメージ研究は、数多く行われてきた。三戸ら¹²⁾は、大学生に体育の授業及びスポーツのイメージを明らかにし、楽しさの強い肯定的なイメージのスポーツを導入していくことで、今後の正課体育でのスポーツ実施において、生涯スポーツの準備、動機づけができると述べている。さらに、原田ら¹³⁾によると、トライアスロン大会に対するイメージを明らかにすることは、スポーツ運営における広報活動に関する情報を得ることができると報告している。また、初心者にとって参加しやすい環境にすることや、トライアスロン大会のキャッチフレーズを生み出せる因子が抽出できると述べている。このように、スポーツのイメージを明らかにすることは、スポーツ参加への動機づけや参加しやすい環境をつくることにも有効であると考えられる。

したがって、本研究では、オープンウォーター参加者が抱く、オープンウォーターに対するイメージを検討した。

2. 研究方法

1) 被調査者

被調査者は、2005年7月18日に千葉県館山市において開催された「OWS ジャパンオープン 2005 館山」および「第9回館山国際オープンウォータースイムレース」の参加者252名であった。

調査は、参加者が受付を済ませた直後に、留置法による質問紙調査を実施した。その結果得られたサンプル数は、質問紙全配布数400枚中の63.0%にあたる252枚であった。

2) 質問紙について

① オープンウォーターのイメージに関する質問項目

5段階評定尺度（非常に、やや、どちらでもない、やや、非常に）によるオープンウォーターのイメージに関する質問26項目を示した。

ただし、26項目中、以下の10項目については、原田ら¹³⁾の質問項目を参考にした。以下にそれらの項目を示す。項目1 楽な－苦しい、項目2 経済的な－不経済的な、項目3 孤独でない－孤独である、項目4 健康的な－不健康的な、項目5 激しい－激しくない、項目6 社交的な－非社交的な、項目7 一般的な－特殊的な、項目8 参加しやすい－参加しにくい、項目9 便利な－不便な、項目10 派手な－地味な。

一方、26項目中、以下の16項目は、オープンウォーターまたは海で泳ぐことに対して連想した評価的修飾語を参考に、修飾語の反意語について筆者が作成したものである。

項目 11 遊戯的なー競技的な, 項目 12 暑いー寒い, 項目 13 息が楽なー息が苦しい, 項目 14 知名度のあるー知名度のない, 項目 15 安心ー怖い, 項目 16 明るいー暗い, 項目 17 開放的なー閉鎖的な, 項目 18 気持ちが良いー気持ちが悪い, 項目 19 新しいー古い, 項目 20 面白いー面白くない, 項目 21 迫力があるー迫力がない, 項目 22 にぎやかなー静かな, 項目 23 リラックスしたー緊張した, 項目 24 醍醐味のあるー醍醐味のない, 項目 25 一体感のあるー一体感のない, 項目 26 達成感のあるー達成感のない.

3. 結果および考察

1) 平均値および標準偏差について

図 1 には, オープンウォーターのイメージに関する平均値のプロフィールを, 平均値の高い順に示した.

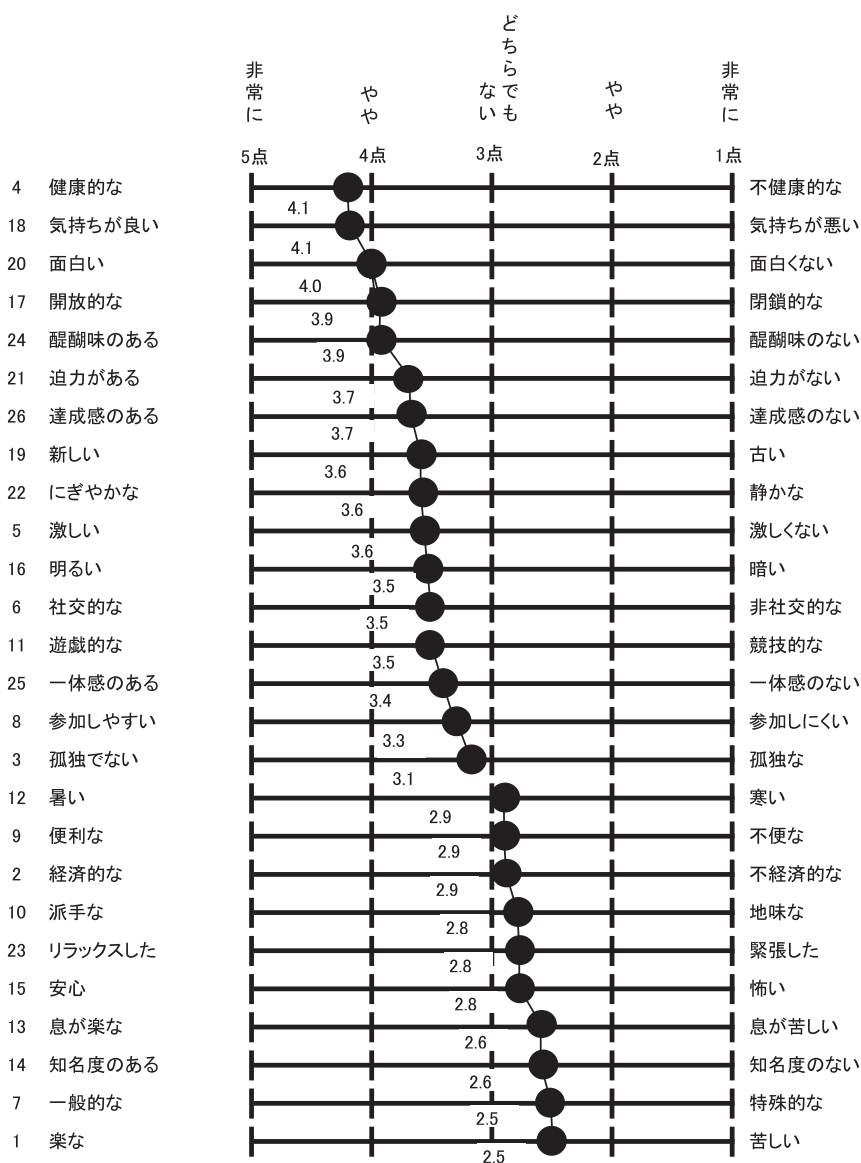


図 1. オープンウォーターのイメージに関する平均プロフィール

オープンウォーター参加者が、オープンウォーターに対して、やや健康的な、やや気持ちが良い、やや面白い、やや開放的な、やや醍醐味のある、やや迫力がある、やや達成感のある、やや新しい、ややにぎやかな、やや激しい、やや明るい、やや社交的な、やや遊戯的なイメージを抱いていた。これらのイメージは、爽快感と結びついていると考えられる。

3) 因子分析について

質問 26 項目の因子を抽出するため、5 段階評定値をもとに、主成分分析 Varimax 回転による因子分析を行った。その結果、固有値 1.0 以上で 8 因子が得られた。表 1 は、因子抽出後、質問項目の因子負荷量を示したものである。また、主成分分析後の負荷平方和を示した。これら 8 因子による累積寄与率は 61.766%であった。

表 1. 主成分分析による質問 26 項目の因子負荷量

質問項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8
F1: 爽快感因子								
18 気持ちが良い－気持ちが悪い	0.754							
17 開放的な－閉鎖的な	0.766							
20 面白い－面白くない	0.718							
19 新しい－古い	0.659							
16 明るい－暗い	0.610							
5 激しい－激しくない	0.547							
21 迫力がある－迫力がない	0.545							
F2: 恐怖感因子								
13 息が楽な－息が苦しい		0.785						
15 安心－怖い		0.712						
12 暑い－寒い		0.495						
F3: 認知因子								
14 知名度のある－知名度のない			0.754					
10 派手な－地味な			0.632					
7 一般的な－特殊的な			0.503					
22 にぎやかな－静かな			0.494					
F4: 外見因子								
6 社交的な－非社交的な				0.695				
3 孤独でない－孤独な				0.641				
4 健康的な－不健康的な				0.528				
F5: 遊戯因子								
11 遊戯的な－競技的な					0.706			
24 醍醐味のある－醍醐味のない					0.508			
25 一体感のある－一体感のない					0.439			
F6: 費用因子								
2 経済的な－不経済的な						0.821		
9 便利な－不便な						0.478		
F7: 参加因子								
23 リラックスした－緊張した							0.828	
8 参加しやすい－参加しにくい							0.567	
F8: 達成因子								
26 達成感のある－達成感のない								0.791
1 楽な－苦しい								0.475
固有値	4.959	3.141	1.649	1.545	1.385	1.210	1.105	1.066
寄与率	19.074	12.081	6.340	5.944	5.326	4.653	4.250	4.098
累計寄与率	15.034	24.019	31.802	39.100	45.217	51.110	56.857	61.766

分析によって抽出された各因子に着目すると、まず第1因子において高い因子負荷量を示した質問項目は、気持がよい、開放的ななどの心理感覚であり、爽快感と関係があると考えられ、これらの因子を「爽快感」因子と命名した。つまり、第1因子の「爽快感」因子において、参加者は、オープンウォーターに対し、やや爽快なイメージを抱いていたことになる。あるいは、オープンウォーター参加者は、この爽快感を求めてオープンウォーターに参加していたとも考えられる。

第2因子に含まれた項目は、恐怖感覚を示した質問項目であり、恐怖感と関係していると考えられ、これらを「恐怖感」因子と命名した。しかし、第2因子の「恐怖感」因子において、参加者は、オープンウォーターに対し、どちらでもないイメージを抱いていたため、参加者は、オープンウォーターに対して、恐怖感はいらないようである。

第3因子に含まれた項目は、オープンウォーターの認知度を尋ねた質問項目が含まれており、認知と関係していると考えられ、これらの因子を「認知」因子と命名した。

第4因子に含まれた項目は、社交観や外見の健康を尋ねた質問項目であり、外見に關係していると考えられ、これらの因子を「外見」因子と命名した。また、原田ら¹³⁾も、以下の2項目「社交的なー非社交的な」、「健康的なー不健康的な」を「外見」因子と解釈している。「外見」において、参加者は、やや健康的、やや社交的といった外見的イメージを抱いていた。

第5因子に含まれた項目は、遊戯性や競技性を尋ねた質問項目であり、遊戯に關係していると考えられ、これらの因子を「遊戯」因子と命名した。

第6因子に含まれた項目は、金銭的内容を示した質問項目であり、費用に關係していると考えられ、これらの因子を「費用」因子と命名した。

第7因子に含まれた項目は、参加の動向を尋ねた質問項目であり、参加に關係していると考えられ、これらの因子を「参加」因子と命名した。

第8因子に含まれた項目は、達成感を示した質問項目であり、達成に關係していると考えられ、これらの因子を「達成」因子と命名した。「達成」において、参加者はやや苦しいが、やや達成感があるといったイメージを抱いていた。要するに、オープンウォーター参加者は、長距離を海で泳ぐことや波のある海を泳ぐなどのことから、精神的や体力的にやや苦しいイメージを抱いているようである。

4. まとめ

本研究の目的は、オープンウォーター参加者が抱く、オープンウォーターに対するイメージを検討することであった。オープンウォーターレース参加者252名を対象とし、5段階評定による質問26項目の質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

- 1) 平均プロフィールから、被調査者は、オープンウォーターに対してやや健康的、やや気持が良い、やや面白い、やや開放的な、などの「爽快感」イメージを抱いていた。
- 2) 主成分分析の結果、8因子が抽出された。第1から第8の順に「爽快感」、「恐怖感」、「認知」、「外見」、「遊戯」、「費用」、「参加」、「達成」因子であり、オープンウォーターの参加者

は、主として「爽快感」を求めているが、あわせて「恐怖感」もいだいてオープンウォーターに参加していたと考えられる。

注 1) ハンドラーとは、小型船舶の上から泳者へ指示をだす者のことをいう。15km 以上泳ぐ際には、選手の危険防止のためハンドラーをつける。また、FINA ルール競技においては、25km でハンドラーが適応される。

5. 引用参考文献

- 1) 日本水泳連盟 (2002) 水泳指導教本. 大修館書店: pp. 246-250.
- 2) www.swimnem.org/newsletters/news0107.pdf.
- 3) 佐野清次郎 (1968) 遠泳—指導法と海の知識—. 不昧堂出版.
- 4) 田中英登・斎藤敦能・佐野裕・田村誠・落合優・蝶間林利男・横山直也・木村昌彦・伊藤伸之 (2000) 遠泳実習における遠泳時体温変動. 横浜国立大学教育人間科学部紀要: pp. 117-123.
- 5) <http://www.fina.org/rules.htm>.
- 6) <http://www.openwater.gr.jp/>.
- 7) 椿本昇三・本間正信・野村武男・坂田勇夫・高橋伍郎・高木英樹・富樫泰一・荒木昭好 (1990) 遠泳が水泳技能向上に及ぼす影響について. 日本体育学会大会号 41: p. 583.
- 8) 高橋弘彦・鈴木省三・宮城進・熊坂繁太郎 (1995) 遠泳時の生体反応に関する調査. 仙台大学紀要: pp. 7-15.
- 9) 下中邦彦 (1981) 新版 心理学事典. 平凡社: p. 424.
- 10) 佐々木康 (1995) スポーツイベントと経済効果.
- 11) シュレイパーA.F. 野口智雄訳 (1996) 顧客をつかむ新イベントマーケティング. 時事通信社.
- 12) 三戸範之・浦井孝夫 (1995) 大学生の体育・スポーツの意識に関する研究—興味・関心及びイメージについて—. 秋田大学紀要: pp. 81-90.
- 13) 原田尚幸・山崎利夫 (1998) スポーツイベント運営における広報活動—トライアスロン大会に対するイメージについて—鹿屋体育大学学術研究紀要: pp. 35-42.

(平成 22 年 3 月 31 日受理)